

「社長！できました！〇・〇二ミリの穴ができました！」

社員のN君が感激余って自分の声に打ち震えるようにして社長室に飛び込んできたのは、ある自動車メーカーからの依頼がうちの会社に舞い込んできてから二週間目のことでした。

「ほんとか!？」

私と自動車メーカーの技術開発担当者も、その声を聞くか聞かないうちに、次の瞬間には皆現場に駆け付けていました。

社内にも伝わりにわかには騒がしくなっています。機械を止めて微細穴加工室に走ってくる社員もいます。

肉眼ではまず見えない〇・〇二ミリの世界。私たちは代わるがわるマイクロスコープをのぞき込みました。そこにはきれいな穴が一個開いていました。

「お見事！」

依頼主である自動車メーカーの担当者も思わず感激のあまりN君の肩を何度も何度も叩

いていました。新車発表までわずか三ヶ月。もうこれ以上遅らせることができず、薬をつかむ思いでうちの会社にとび込んできた担当者にとって、これ以上の喜びはありません。

それは平成十三年六月七日、午前十一時過ぎのことでした。

これこそうちの会社、今日のダイニチにとって記念すべき瞬間だったのです。この成功はのちに共同開発で進めていたロボットハンドとともにつながっていく機会となった、うちの会社の命運を担うすばらしい出来事でした。

この本は、小さい部品加工、極細の穴加工など、微小な技術に目覚め、その価値を築くためにあらゆる方法を考え抜き、今もまさに追求し続けている私たちの物語です。